

村半利活用検討会（令和7年度第4回）結果報告

日時 令和8年3月30日（月）16時～17時

場所 村半 大会議室

出席者 検討会メンバー7名、事務局（総合政策部総合政策課）5名

内容

1 協議事項

(1)利用状況等について

- ・令和7年12月～令和8年3月の利用状況や占用利用実績等について説明
- ・今後の占用受付について

(2)その他

- ・令和8年1月関東出張報告
- ・旅立たれる方へのメッセージと2025メモリアルボード

<意見交換、質疑> メ:構成メンバー、事:事務局

(1)協議事項に対する意見等

メ:今年度の登録者数について、小学生の登録者数が47人とあるが背景やどういった利用をされているか教えてほしい。

事:昨年西小学校4年生の先生から高山市のバリアフリーの取り組みについて出前講座の依頼があった。その際に村半を紹介したところ、日を改めて4年生のみなさん全員に村半に見学に来ていただいた。見学後に多くの生徒さんに登録いただき、現在も利用が続いている。

メ:大変良いことだと思う。今後も期待したい。

事:どんな利用をしているのかについては、ゲーム機を持ってきて3人で同時にゲームをしていたり、本をいっぱい持ってきてスタッフに読ませてくれたり、村半をわざわざ選んで来てくれている印象がある。大人が台所で料理をしているところに入って行って、アレルギーの確認をした上で食べさせてもらったり、外の道路でスタッフが水打ちをやっているのを手伝ってくれたり、スタッフと一緒に折り紙をしたりと、目的はないけど一緒にいるとあたたかいと思って来てくれていると思う。最近では花里小の子も図書館がいっぱいだったことがきっかけで大勢で村半に来てくれることがある。

メ:文化会館の小ホールで昨年と今年に若者のバンドを集めたイベントを実施した。文化会館の利用者は高齢の方が多く、若者にも来てほしいという思いで私が企画したイベントで、十数団体集まった。私たちがお膳立てをして全部整えてどうぞと言うと若者は来るように思う。自分たちで企画を立てて実行する気概が無いように感じる。今年は参加者の若者にチケットを売ってほしいと頼んだがいまいちだった。知り合いであってもチケットを買ってと言うこと自体に苦痛があるみたいだ。今の子はみんなそのようなのか気になったが、村半のこどもたちはどうか。

事: チケットを売ることについては、毎年3月に飛騨地域の高校生を集めてイベントを開催されている高校生の団体「MAP 実行委員会」のこどもたちから、相手が喜ぶかどうかかわからないものをお金をもらって渡すことにとても葛藤があると聞かせてもらったことがある。相手のことを思いやる気持ちがあるからできないのではないかと受け止めた。イベント開催を目的とした団体のメンバーなので、アクティブにやっていきたい気持ちがあるこどもたちだと思うが、チケットの販売に苦労していることに対しては私は思いやりを感じた。若者の変化という点については、心の複雑さもあるかと思う。ざっくり物事を考えている子は少ないように思う。

メ: チケットの購入を断られるといったことなどで自分が傷つきたくないという思いもあると思う。傷つくことを恐れて人と接することを避けていき、人との関わりができなくなっていくのは怖いと思う。傷つくのが怖いという思いがあったとしても、人と接していくことができるようになるようなことがこの村半の空間の中でできたら良いと思った。

事: 人と接する壁を乗り越えるような小さな成功体験の場面を見ることがある。例えば狭い台所で他属性の利用者同士で共用利用をしなければならなくなったときに、「一緒に使っていいですか？」と声を掛けることも一つ。受け入れられた成功体験が少ないと恐怖が生まれると思うので、まずはコミュニケーションが生まれる状況を作ることと、もし失敗してもスタッフが「ナイスアクションだったよ」と本人に声を掛けるなど救い上げていくことが大事だと思う。村半は来所者同士の接触ができるような場面を作っていくやすい施設だと思うので、意識しながら業務にあたっていきたい。

メ: みなさんに情報共有したいことがある。令和7年11月に8大学の11人の大学生が飛騨で地域貢献や自己実現をしようと「飛騨高山わいわい企画サークル」という団体を立ち上げた。年齢も学校も東京や名古屋などばらばらだがひとつのかたまりとなって動き出した。意欲やアイデアのある優秀な学生たちなので、彼らと村半とを結び付けて何かできると良いと思うし、彼らが活動するうえで村半が有効なものになると良いと思う。来年度彼らを村半に連れて行きたい。

事: できることはどれだけでも協力したい。若者活動支援事業とも何か絡めることができないか。

メ: 村半を拠点として打合せをしてもらったり、関わっていくことはできると思う。

メ: 1月の関東出張に同行したためそのときの感想を少し述べたい。武蔵野市と鎌倉市の2つの施設を見に行った。まちの規模も違えば施設を建てた経緯も異なるが、この村半の検討会でよく課題として挙がっている、若者の主体性とそれを見守る大人との関係、どこまで大人が口を出していけば良いのかといったようなことがいずれの施設でも課題となっていることを聞いた。若者に関する課題というのはまちの規模に関わらず全国共通のものがあると思った。

メ: 利用状況を見ると、高校については斐太高校が多く、次いで飛騨高山高校となっているが、これは学校の立地条件、学生が学校に通う途中に村半があるという状況が関係していると思うし、中学生も同じような傾向があると思うが、そういった差はそれほど気にすることではないのではないかとと思う。先ほどの報告にあった若者対象の企画には若者は入らないという武蔵野市の課題であったり、若い子は企画力がなく、みんなで楽しいことをやろうという学生が減ってきたということがある中で、「MAP 実行委員会」といった市の支援を受けながら活動している学生もいたり、一方で村半の

ようなところに来て、ゆくりと繋がる場面もある。現在、多様性への対応や個別の支援、個別への教育が課題の一つにあるが、これまでは学校が終わると部活動で汗を流して後は家に帰って寝るだけという過ごし方をわたしたちはしてきたが、そうではない、またそういうことを苦手とする子が集まってそれぞれ活躍する場面をつくるという点では、この村半は貴重なひとつの施設ではないかと思っている。そういう観点からも部活動や大勢で集まることが少し苦手な学生が、村半に来て大人や大学生と接する機会があったとか、成功体験が加わったといった、村半はひとつの成長の糧になるような施設になっているのではないかと1年この検討会に参加して感じた。

事: SNS では利用者さんの様々な使い方を紹介をしているが、こんな使い方ができるんだということを発見してもらいたいと思っている。引き続きどんな子が来ても丁寧に対応したいと思う。

事: 工業高校のことを口にしない日はないくらい、工業高校さんに制作いただいたたくさんの家具や模型を多くの方にすごいと言ってもらっている。村半の価値を高めてもらっている。

メ: 各高校と連携し、各学校から数名ずつ参加してもらって、村半を見てもらったり広めてもらうようなことをしてはどうか。また、過去の検討会で問題点がいくつかあったとは思いますが、現在はどのような状況か。

事: カップルの対応については中央蔵1階の扉のくもりガラスを部屋の中をスタッフが見れるように透明ガラスに変更した。また、ごみを持ち帰らない子については、現在は当事者だった子が一緒に来た友達に「ここはごみを置いて帰るとスタッフが怒るで持って帰らんとだめなんや」と話してくれるようになった。ごみの置き去りの件については、若者との関わりはその時の場面だけ見ていては分からないことがあると学んだし、こどもたちに対して気長に心を持って向き合っていくことがとても大事だと感じた。これから新学期を迎えてまた同じことが繰り返されていくと思うが、丁寧に向き合っていきたいと思う。

事: 高校生への周知については、4月に市内の全高校を回らせていただき、その際に様々な市からのお願いに加えて村半の周知をお願いしているところ。今後もこのような形で広めていきたいと思うし、様々な機会を捉えて周知を進めていきたいと思っている。

メ: 以前にも話したが、景観保存の点で村半の外壁の色は個人的に不釣り合いだと思う。高山市では使用する色の制限をしていて、こげ茶や黒など色を統一していく事業に対して補助金を出している。経緯は以前も聞いたが、改築の際には色を含めて検討をしてほしいと思う。

メ: 村半の外壁の色は基本的には自然素材を使っている。本当は荏油を使いたかったが手に入りにくかったので、亜麻仁油と弁柄を混ぜ合わせた。硝煙という炭を入れていたという話もあったため、赤黒いものから赤っぽい色など板を何パターンか作って表に当てながら、今塗ってある色はどの色に近いかをあてがってみたうえで決定した。黒く塗ってあったところもあって、そこには弁柄に松ヤニも加えた自然素材で塗った。塗ってあった場所には同じような形で塗り直す、元々高山にあったものに合わせようという方針で行った。昔ながらのやり方でやらせてもらった。

メ: 古い町並は茶色で統一されているので赤は少し違和感がある。赤い色は補助金の対象外となるのか。

メ:この地区において、元々の塗料や自然素材であれば対象になる。

メ:今生きている人は村半が建った頃の色を知らないから、急に赤になるとびっくりするのは当然だと思う。京都の神社でもだいぶ昔に行ったときはくすんだ色だったのが、何十年ぶりに行った際に真っ赤になっていてびっくりしたが、それが本来の色ということだった。今慣れている色が良い色かというところでもないんだという感覚を私たちは持たなければならないのかもしれない。

メ:最近の文化財の修繕では元々の原点に帰ろうという傾向にあり、元々の色が修繕に使われている。弁柄の赤と朱の赤は微妙に違う。浅草の浅草寺の鳥居はツートーンになっていて2色使用されていたことがわかって、そのように修繕したという例がある。

メ:幼い頃はこういう色の家は点在していたように思う。

メ:家によって違うと思うが、柿渋を塗っていたところもあったようだ。

事:昔はいきなり黒く塗るものではなくて、最初に薄く塗って油を染み込ませて木目を出していき、それを何年も何年も繰り返し塗っていくことで結果的に黒くなっていくと聞いた。そうすることで建物の強度が上がったり材質が保たれたり、耐火性を高めることができた聞いた。

メ:弁柄や柿渋などの使用は、木を長く保ちたいという昔の人の工夫だと思われる。

以上